

キーワード: 京阪方言、現代共通語、～テオク、持続、主格維持性

要旨:

本稿は、京阪方言における～テオクの<持続>用法の通時的変遷について考察する前段階として、先行研究の再検討を行ったものである。まず、当該方言の～テオクの<持続>用法の広がりには、先行研究で提示された時間的限界点(temporal limit)に関わる分類だけでは捉えきれないものであることを指摘する。次に、当該方言の～テオクが、現代共通語の場合と同様、「主体変化客体動詞」及び「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」に後接するだけでなく、「主体変化動詞」、「主体動作動詞」、「長期持続動詞」「思考動詞」の一部、さらには存在動詞の「いる」にも後接するという事実を示す。そして、新たに「主格維持性」(野田 2010)という概念を導入し、～テオクの<持続>用法が主格維持性の認められる範囲で拡大を見せていると論じる。

1. はじめに

京阪方言では、動詞テ形+オクに由来する「～テオク」(通常その縮約形「～トク」)が、現代共通語の場合よりも<持続>用法を広げているとされる(沖 1996、高田 1999)。例えば大阪方言では、現代共通語の～テオクでは表せない、次のような表現が可能である(以下の例文中の下線による強調は全て筆者による)。

(1) [図書館で本を借りる間待っているように言われて]

いいわ、(図書) 検索のところで遊ソドクわ。(高田 1999:59(20))

(2) [行動をなかなか起こさず躊躇している相手に対して]

やるんやったらやる! やらへんのやったらまっすぐ見トク! (同:59(21))

京阪方言の～テオクにおける<持続>用法は、いつ頃どのように生じてきたのだろうか。この問題を解明する前段階として、本稿では、先行研究の再検討を行う¹。そして、当該方言の～テオクが「主格維持性」(野田 2010)を持つ文において<持続>用法を広げていることを指摘する。具体的には、京阪方言の～テオクについての主な先

¹ 現代共通語の～テオクをめぐるっては、アスペクトの意味とともに「もくろみ」的な意味も注目されているが(高橋(1969)他)、本稿では、当該形式の表す時間性に注目するため扱わない。

行研究を検討したあと(第2節)、野田(2010)の「主格維持性」という概念を紹介し(第3節)、当該形式の<持続>用法がこの「主格維持性」を持つ文において成り立つことを確認する(第4節)。最後に考察をまとめる(第5節)。

2. 先行研究の検討

現在の京阪方言の～テオクに関しては、沖(1996)、高田(1999)、大場(2004)等に言及がある。以下、これらの論考について順に検討していく。

2.1. 現代共通語との違いを指摘した沖(1996)

沖(1996)は、現代共通語では～テイルを用いて表現すべきところを、京阪方言(およびその周辺地域)では、以下のように～テオクで表現することを指摘している。そして、この～テオクが用いられるのは、「対象に変化を与えることをあらわさない他動詞(以下不変化他動詞)および自動詞」(沖1996:36)に後接する場合であり、アスペクティブな意味としては「①その動作の状態、動作に入っていること<始動>②そしてそれがあつた短い時間のあいだ継続・維持されること<持続>を表現している」(同:36)とする。

- (3) ジュギョーガ オワルマデ マツケ (沖1996:34(15))
- (4) ココ モツキナサイ (同:34(16))
- (5) アサマデ オキトコ (同:34(19))
- (6) サキ カエツクナー (同:34(20))
- (7) ジュギョーガ オワルマデ タツケ/タツキナサイ。 (同:35(21))
- (8) アシタワ オヒルマデ ネトコ。 (同:35(22))
- (9) ジブンガ カエツケルマデ ホンデモ ヨンドクワ。 (同:35(23))
- (10) 「マダ ジカン アルカラ エーガデモ ミトコカ
「ミトコ ミトコ」 (同:35(24))
- (11) ミンナ ソロウマデ コーヒーデモ ノンドコーカ。 (同:35(25))

沖(1996)は、現代共通語の～テオクと異なり、京阪方言の～テオクが「不変化他動詞」及び「自動詞」に後接する際に<持続>を表しうることを示した点で高く評価される。しかし、<始動>という意味特徴に関しては、以下の理由により議論の余地を残している。まず、(5)(8)のような必ずしも<始動>を表さない例をどう説明するのかという問題である。次に、沖(1996)に挙げられているのはいずれも、発話時点で当該の動作が行われていない例であり、結果として<始動>の意味を読みとれるようにな

った可能性が残されている²。

2.2. 大阪方言の～テオクを体系的に記述した高田(1999)

高田(1999)は、大阪方言の～テオクについて、「ある時までにある動作を行うこと」、「ある時まで一定の状態を持続させること」(高田 1999:61)の2つのアスペクトの意味を表す点では現代共通語の～テオクと共通しているが、当該方言では「ある時まで一定の状態を持続させること」という<持続>を表す用法において共通語の場合よりも広がりを持ち、「<客体変化の結果維持>の他に<主体変化の結果維持>や<動作過程の継続>をも表すことができる」(同:63)とする。

「ある時までにある動作を行うこと」を表す～テオクとは、次の(12)～(16)のような例である。以前に行われた行為が設定時において効力を持つことが表されている点で、「抽象的なパーフェクトの意味を表す用法」(金水 2000:69)といえる(以下では、<効力作成>と呼ぶ)。

- (12) 8 時までに窓を開ケトク。 (高田 1999:59(22b))
(13) 雨が降るまでにカバーをカブセトコ。 (同:59(23b))
(14) [早起きして]5 時までに起キトク。 (同:60(24b))
(15) [先生が戻ってくるまでに走ツトケ]。 (同:60(27b))
(16) [晩ごはんができるまでに勉強シトコ]。 (同:60(28b))

他方、「ある時まで一定の状態を持続させること」を表す<持続>の～テオクの例としては、主体動作客体変化動詞に後接し「客体変化の結果維持」を表す(17)(18)、「主体変化動詞」に後接し「主体変化の結果維持」を表す(19)(20)、「主体動作動詞」に後接し「動作過程の継続」を表す(21)(22)がある³。

- (17) {8 時まで/しばらく}窓を開ケトク。 (高田 1999:59(22a))
(18) 雨が上がるまでカバーをカブセトコ。 (同:59(23a))
(19) [徹夜して]5 時まで起キトク。 (同:60(24a))
(20) {授業が終わるまで/しばらく}廊下に立ツトケ。 (同:60(26))
(21) [先生が戻ってくるまで]走ツトケ。 (同:60(27a))
(22) [晩ごはんができるまで]勉強シトコ。 (同:60(28a))

さらに、同論考では、京阪方言の～テオクが表す<持続>の下位類間に用法上の制

2. 同様のことが大場(2004)にも指摘されている。

3. 「主体変化動詞」「主体動作動詞」は、沖(1996)の記述に照らし合わせれば、前者は「自動詞」、後者は「不変化他動詞」にはほぼ相当する。

約による階層性があることが指摘されている。その中では、制約がなく、現代共通語の～テオクでも表しうる「客体変化の結果維持」を「本来的な用法」とし、この用法からより制約の多い「主体変化の結果維持」、「動作過程の継続」へと用法が拡大してきたことが示されている。これは当該形式の通時的変化を考える上で注目に値する。

(23) 客体変化の結果維持 > 主体変化の結果維持 > 動作過程の継続

制約無←

→制約有

(高田 1999:68 を一部改変して引用)

高田(1999)の分析は概ね妥当なものであり、多くの示唆に富んでいる。ただし、分析に先立ってなされた動詞分類の一部に注意すべき箇所がある。それは、「状態性動詞」のうち、「長期持続動詞」⁴（「飼う」「会う」「待つ」「休む」）と「思考動詞」（「思う」「考える」「信じる」）について、「比較的動作的と捉えられるものは、例外的にテオク形で用いられる」（同:74）とし、『主体動作動詞』に類するもの⁵し、まとめて扱って差し支えない」（同:74）と述べられている箇所である。「長期持続動詞」と「思考動詞」は、「痛む」や「しびれる」等の他の「状態性動詞」と比較すれば確かに動作的である。しかし、「食べる」等の典型的な「主体動作動詞」とは違い、刻々と展開するような動きではないこともまた事実であり、～テオクが表す<持続>の内実を考える際に重要な意味を持つように思われる。

このことは、例えば、<持続>の下位類間における階層性を考える際に根拠の一つとされた、文末のタ形に関する制約例からも浮かんでくる。同論考では、文末のタ形において、「動作過程の継続」を表す場合（(24)）と「主体変化の結果維持」を表す場合（(25)）を比較すると、前者の方が容認度が下がるとされている。

(24) ??君が通るかと思って、家の前で遊ンドイタのに。 (高田 1999:68(54))

(25) ?君が通るかと思って、家の前にずっと立ットイタのに。 (同:68(53))

「待つ」「考える」等の「状態性動詞」を用いた場合の文末のタ形の制約については、何も言及されていないが、仮にこれらの動詞を「主体動作動詞」に準じるものとして扱った場合、後接する～テオクは「動作過程の継続」を表すことになり、文末をタ形にすると容認度が下がることになるが、実際はどのようなのだろうか。(24)とは同程度、(25)との比較では容認度が低い、ということになるのだろうか。

4. 「会う」「待つ」等の動詞の表す持続時間が「長期」かどうかという点は疑問であり、「長期持続動詞」という名称には抵抗があるが、本稿では高田(1999)に従っておく。

そこで一つの試みとして、筆者の作例を京阪方言の話者に判定してもらった⁵。話者には、言えるものに「○」、言えなくはないがあまり自然ではないものに「?」、どちらかというと言えないものに「??」、言えないものに*をつけてもらった。その結果は次のとおりである。

- (26) ??君が通るかと思って、家の前でずっと遊んどいた。
- (27) ?君が通るかと思って、家の前にずっと立っといたのに。
- (28) ?君が通るかと思って、家の前でずっと待っといたのに。
- (29) ○外めっちゃ寒かったから、こたつ中でじっとしといたわ。
- (30) *授業中に習った数式のことを気になって、一晩中考えといた。

まず、「主体動作動詞」を用いた(26)と「主体変化動詞」を用いた(27)を比較すると、高田(1999)の大阪方言の結果同様、(26)の容認度の方が低いことがわかる。その上で、「状態性動詞」について見てみると、「長期持続動詞」を用いた(28)(29)では(27)と同程度かそれ以上に容認度が高い一方、「思考動詞」を用いた(30)では全く容認できないことがわかる⁶。容認度の高い順に並べると、「長期持続動詞」 \geq 「主体変化動詞」 $>$ 「主体動作動詞」 $>$ 「思考動詞」ということになる。この結果は一人の話者の内省にすぎないためこれ以上の考察は控えるが、本研究では典型的な「主体動作動詞」とのふるまいの違いを重視して、「長期持続動詞」と「思考動詞」を「主体動作動詞」とは別に扱うこととする。

2.3. <持続>の周遍的な用法に言及した大場(2004, 2005)

大場(2004,2005)については、高田(1999)において「アスペクトの体系を持っているとは見なせない」ために考察から除外された放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形なども取り上げている点が注目される。次の(31)~(34)は現代共通語の~テオクの例である。

- (31) あんな奴、ほっときな (筆者による作例)
- (32) 急病人は救急車が来るまで動かさないでおいた (筆者による作例)

5. 話者は、1977年生まれの32歳女性。兵庫県赤穂市(0~11歳)、京都市伏見区(11~18歳)で、それ以降は進学・就職・結婚により、海外も含め数年単位で引越しをしている。2008年より大阪市在住。

6. ただし、文末のタ形において<持続>を表す際、この話者にとって最も自然なのは~テイルを用いた表現である。(例)「君が通るかと思って、家の前で遊んでたのに。」「昨日は学校休みやったから、一日中家で休んでた。」このことは、高田(1999)の大阪方言の報告とも重なっており、高田は「タ形にすることによって客観叙述性が増している」ので、(中略)テイル形が用いられるのが自然(同:68)であるとしている。

(33) 家事をしている間は、息子にテレビを見させておく。 (大場 2005:24(20))

(34) 夏に食べ物を食卓の上に出したままにしておいたら、腐ってしまうよ。

(同:24(21))

上例からうかがえるように、現代共通語の～テオクも、「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」(大場 2004:6)に後接する際には<持続>の意味を表しうる。大場(2004)はこの事実を沖(1996)に示された京阪方言の場合と比べ、<持続>用法⁷の方言差が「動作中の状態の保持」(大場 2005:23)を表すとされる用例群において現れることを主張した。

このように大場(2004,2005)は、<持続>を表す～テオクについて、現代共通語と京阪方言の違いを明確にした点で示唆的であるものの、その分析には気になる部分もある。それは、「動作過程そのものの保持」を表す用例群の中に、「動作過程」を表しているとは言い難い例が含まれるなど、分類に不備が認められる点である。

(35) (例(34)再掲) 夏に食べ物を食卓の上に出したままにしておいたら、腐ってしまうよ。

(36) うっかりして、裏口の鍵をあげたままにしておいたら、泥棒に入られた。

(大場 2004:26(30))

(35)では「食べ物を食卓の上に出す」という動作が行われた後の状態が、(36)では「鍵を開ける」という動作が行われた後の状態が、それぞれ維持されているのであり、むしろ「客体変化の結果維持」(高田 1999)と見るべきである。

同様に、「動詞の否定形」に後接する～テオクも「動作過程」を表しているのか疑わしい。この場合の～テオクは、「出来事以降の効果を見越して、当の状況にあっては行ってもおかしくない動作をあえて行わないという意味を持つ」(金水 2000:70)とされるが、出来事(event)そのものが生起していない以上、「しばらく窓を開けておく」や「(ごはんができるまで)勉強シトコ。」で表される<持続>とは性質がかなり異なるといえる。

(37) (例(32)再掲) 急病人は救急車が来るまで動かさないでおいだ

また、「放任を意味する動詞」「使役動詞」に後接する～テオクを「動作過程そのものの保持」を表すとする点についても注意を要する。「動作過程そのものの保持」とい

7. 本稿の<持続>用法は、大場(2005)では「状態の保持」に相当する。この「状態の保持」は、当該の動作が終了後か否かでさらに、用例群A「『動作終了後の状態の保持』を表すとされるもの」と、用例群B「『動作中の状態の保持』を表すとされるもの」に分けられている。

う意味特徴は、高田(1999)の用語では「動作過程の継続」に相当する。そのため、「動作過程の継続」と同様に扱くと、〈持続〉の下位類の中では最も制約の多い用法に分類されてしまう。ところが実際は、現代共通語と京阪方言の～テオクの双方に共通する用法なのであり、「動作過程の継続」を表す際の制約も見られないため、齟齬を来たすことになる。

以上で取り上げた、「長期持続動詞」と「思考動詞」に後接する際の問題(2.2節)と、「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」に後接する際の問題(2.3節)とは、実は問題の根幹を同じくしていると考えられる。これらの動詞に共通して言えるのは、いずれも時間の経過とともに展開するような動きではないということであり、この共通性は、先行研究で提示された「動作過程の継続」や「主体変化動詞」といった時間的限界点(temporal limit)に関わる分類だけでは捉えきれないものである。このような場合も含めた上での～テオクの表す〈持続〉の広がりを理解するためには、他の観点を導入する必要があると考える。

3. 主格維持性とは

先行研究を検討する中で見えてきた問題点をふまえて、以下では、〈持続〉の～テオクを統一的に捉えるために、野田(2010)で提出された「主格維持性」という概念を導入する。本節でこの概念についての概要を紹介した後、第4節で〈持続〉の～テオクが成り立つのは「主格維持性」を持つ文においてであり、京阪方言での〈持続〉用法の広がりもこの範囲で認められることを確認する。

野田(2010)によって提出された「主格維持性」は、「主格に立つ物の意図性」(野田2010:1)を表し、「[1]主格によってなされるものであること、及び、[2]ある状態が意図的に保持されるものであること、という2つの要素を組み合わせたもの」(同:4)である。この概念はまた、「この素性自体は変化の結果を含むか否かを問題にしない」(同:2)とされる点で、従来の「維持」や「結果の維持」よりも広い概念といえる⁸。

⁸ 「維持」「結果の維持」については、森山(1988)や日本語記述文法研究会(編)(2007)に定義がある。例えば、日本語記述文法研究会(編)(2007)は「結果の維持」を「変化によって実現した結果状態が、主体の意志的制御によって維持されることを表す」(日本語記述文法研究会(編)2007:29)とし、次の例を挙げている。(例) 鈴木はさっきからずっと立っている。／田中はベッドに横になっている。(以上、同:29)／パーティーのあいだ、食卓に花を飾っておいた。(同:5) また、森山

野田(2010)の記述に従えば、以下の例のうち(38)(39)は主格維持性を持つが、それ以外の(40)～(42)は主格が有生(animate)でも主格維持性はないということになる。

(38) 須原君は現在本を読んでいる。 (野田 2010:2(1))

(39) 先ほどから猫が警戒して木陰に隠れている。 (同:3(5))

(40) 東四郎は現在上司にしかられている。 (同:2(2))

(41) 孫助は現在うたた寝をしている。 (同:3(3))

(42) しばらく見ないうちに、甥は私よりも大きくなっていた。 (同:3(7))

ただし、「主格」という用語には注意が必要である。一般に、主格(nominative case)と呼ばれるのは、「原型的他動詞文の動作者の項と自動詞文の唯一の項が同じ格で示される場合」(角田 1992:173)の格であり、現代日本語では「が」が主格を表す⁹。形態面を重視したこの規定では、(38)や(39)だけでなく、「私はそんな彼女が好きだ」「超高層ビルが駅前に建設された」のような場合の「が」も主格となるが、野田(2010)の「主格維持性」ではそもそも考察の対象から外されている。「主格維持性」の「主格」とは、むしろ、「主語(subject)、或いは、森山(1988:30)の「動きの発生に対する主語名詞(動作主とは限らない)の関与の性質の問題」を扱う「主体性」の概念に近いという印象を受ける。この点で「主格維持性」という名称の適切さに疑問も残るが、ここでは野田(2010)に従っておく。

4. <持続>用法の広がりとは主格維持性の関わり

第2節において検討した先行研究の問題点は、主格維持性という概念を導入することにより、ある程度解決が可能である。ここでは、現代共通語と共通する<持続>用法と、現代共通語では表せない京阪方言独特の<持続>用法とに分けて論じていく。

4.1. 現代共通語の～テオクと共通する<持続>用法への適用

主格維持性の概念を導入すれば、現代共通語の～テオクと共通する<持続>用法に関して統一的な説明が可能になる。「主体変化客体動詞」に後接し「客体変化の結果維持」を表す例((43))、「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」に後接する例((44)～(46))を見ると、いずれの場合も主格維持性が認められる。

(1988)の「維持」も、この「結果の維持」に近く、「維持」には「主体変化の結果が残されるものと客体変化の結果が残されるものがある」(森山 1988:143)とする。

9. ただし、「は」が付いた時には「が」は隠れてしまう(角田 1992 参照)。

- (43) (例(17)再掲) {8時まで/しばらく} 窓を開ケトク。
 (44) (例(31)再掲) あんな奴、ほっときな¹⁰
 (45) (例(32)再掲) 急病人は救急車が来るまで動かさないでおいた
 (46) (例(33)再掲) 家事をしている間は、息子にテレビを見させておく。

第3節で述べたように、主格維持性と類似の概念として「維持」や「結果の維持」があるが、規定の中に「変化の結果」を含むため(44)~(46)のような例の説明に苦慮する。他方、「変化の結果」の有無を問わない主格維持性ならば、(43)~(46)をまとめて捉えることが可能になる。

4.2. 現代共通語の~テオクでは表せない<持続>用法への適用

まず、~テオクが「主体変化動詞」に後接し「主体変化の結果維持」を表す例((47))、「主体動作動詞」に後接し「動作過程の継続」((48))を表す例では、主格維持性が認められる。

- (47) (例(19)再掲) [徹夜して]5時まで起キトク。
 (48) (例(21)再掲) [先生が戻ってくるまで]走ットケ。

なお、高田(1999)は、以下の(49)(50)を挙げ、「主体変化動詞」の中でも「<主体の永続的な変化を表す動詞のテオク形は、<主体変化の結果維持>を表す用法を持たない」(同:61)としている。その上で(50)を適格と判断する話者もいるとし、その場合は「変化が一時的な(元に戻り得る)ものとして解釈されているのだろう。」(同:75)と説明している。

- (49) ??しばらく退院シトク。 (高田 1999:61(36))
 (50) ??もうちょっとこの人と結婚シトコ。 (同:61(37))

ここで、補足として、先に紹介した京阪方言の話者への調査結果を示す。

- (51) ?退職金が出るまではこの人と結婚しとこ。
 (52) *しばらく退院しとくわ。
 (53) *しばらく卒業しとこ。

いずれの例も言い難い点では一致しているが、「結婚する」を用いた(51)と、「退院す

¹⁰ (44)、及び後掲の(48)(54)は命令文である。命令とは、上位者である話し手が下位者の聞き手に対して、その行為の実行を強制する機能であり、「聞き手にその要求を受け入れるかどうかに対する判断の余地を与えないほどの強制力をもつ」(日本語記述文法研究会(編)2003:67)。しかし、その命令は、聞き手が実行後の状態を意図的に保持できるという前提がなければ発せられない。このことは、「*ロシア語がわかれ」のような無意志動詞が命令文で用いられないことからもうかがえる。以上により、本稿では命令文において維持される主格を「聞き手」と捉えることにする。

る」「卒業する」を用いた(52)(53)では、やはり容認度に違いがあるようである。この違いについて、上述の高田(1999)のように説明することも可能だが、筆者は主格維持性の有無という点からも説明できると考える。結婚した状態とは、婚姻関係を結んだ後に「主格に立つ物」が意図的に保持しなければ成り立たないものである。一方、後二者の「退院する」「卒業する」については、行為自体は意図的だが、その後の状態を意図的に保持することまでは含まれておらず、主格維持性が認められない。〈持続〉用法の～テオクの容認度の違いは、この差に起因していると考えられる。

続いて、「状態性動詞」に後接する例について見ていく。まず、「長期持続動詞」に後接する場合、主格維持性が認められる。

(54) (例(3)再掲) ジュギョーガ オワルマデ マツトケ

「思考動詞」への後接例は先行研究に具体例がないため、筆者の作例に対する京阪方言話者の内省結果をもとに考える。

(55) ○離れててもあんたのことずっと思とくわ。

(56) ○離れててもあんたのことずっと信じとくわ。

(57) ??この数式の答え簡単には出せそうもないから、
答えが出るまでずっと考えとくわ¹¹。

話者の内省では、(55)(56)は全く問題がないが、(57)は違和感を覚えるということである。この差が何に起因するのか今の段階では明らかではない。「主格に立つ物」が思考の状態を持続可能なものとして意図的に制御できるかは、「思考動詞」ごとに異なっているからかもしれない。

このように、「長期持続動詞」と「思考動詞」に後接する場合も、主格維持性は認められる。～テオクが〈持続〉を表すのは、これらの動詞が「比較的動作的と捉えられる」(高田 1999:74) ためというよりも、むしろ、「主格に立つ物」の意図によってその状態をある程度制御できるためであると考えられる。

さらに興味深いことに、内省調査により、京阪方言では～テオクが存在動詞の「いる」に後接して〈持続〉を表す文も用いられることがわかった ((58))。その場に存在し続けるか否かは、「主格に立つ物」の意志で決定されるものであり、主格維持性が認められる。

(58) ○しばらくそこにいといて

(58)のような「いる」への後接例は管見では他に報告がない。ここから容認度に関し

11. 〈効力作成〉の～テオクならば文法的に適格である。(例) この数式の答え簡単には出せそうもないから、明日までに考えとくわ。

て世代差の見られる可能性が示唆される。今後の社会言語学的調査が急がれる。

4.3. まとめ

以上で述べたことをまとめ直せば次のようになる。

～テオクの<持続>用法は、主格維持性を持つ文において成り立つ用法である。この<持続>用法は、現代共通語では「主体変化客体動詞」及び「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」に後接する場合に限定されている一方、京阪方言では、主格維持性の認められる範囲で拡大を見せ、「主体変化動詞」、「主体動作動詞」、「長期持続動詞」「思考動詞」の一部、さらには存在動詞の「いる」への後接をも許しながら、<持続>の下位類におけるバリエーションの幅を広げている。

5. おわりに

本稿では、京阪方言の～テオクが表す<持続>について、先行研究を再検討した上で、当該形式が主格維持性を持つ文において<持続>用法を広げていることを指摘した。

この<持続>用法がいつ頃どのように広がってきたのかについては、現在、大阪落語 SP 盤の文字化資料や京都・大阪の方言談話資料に当たり調査を進めているところである¹²。「客体変化の結果維持」から「主体変化の結果維持」への拡大を経て「動作過程の継続」に至るといふ高田(1999)の解釈について検証を進めるとともに、「放任を意味する動詞、使役動詞、動詞の否定形など、おおよそ『他人の意志に任せる、現状をそのまま維持する』という意味特徴を持つ動詞」や「状態性動詞」（「長期持続動詞」及び「思考動詞」）に後接し<持続>を表す例が文献上いつ頃現れるのかという点にも注目し考察を行う予定である。

さらに、用法拡大の要因については、これまでのところ西日本諸方言のアスペクト体系との関連性が指摘されている（沖 1996、高田 1999）。例えば高田(1999)は、「主体変化の結果維持」への用法拡大を「<客体変化の結果維持>における客体についての

¹² 大阪落語 SP 盤の文字化資料としては、真田信治、金沢裕之（編）（1991）『二十世紀初頭大阪口語の実態—落語 SP レコードを資料として—』（平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究(B)課題番号 01450061「幕末以降の大阪口語変遷の研究」研究成果報告書 大阪大学文学部社会言語学講座）、金沢裕之（編）（1998）『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』（平成十年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 09610427「明治時代の上方語におけるテンス・アスペクト形式」研究成果報告書 岡山大学文学部対照日本語学研究室）を利用している。

捉え方を主体の場合に置きかえただけ」(同:63)であるとする一方で、「動作過程の継続」への用法拡大は「動作過程を<開始限界達成後の段階>として把握したもの」(同:63)であり、「本来 resultative (perfect) aspect を担う形式による imperfective aspect の統合」(同:73)という、「西日本諸方言のアスペクト体系における変化の大勢に沿ったもの」(同:73)であると解釈している。また、西日本の諸地域では<持続>を表す新形式として「～ヨク」という新形式も報告されている(田口 1992 他)¹³。今後、西日本の他の方言の～テオクの記述を進めながら、用法拡大の要因に関する考察も深めていきたいと考えている¹⁴。

引用文献

- 大場美穂子(2004)「補助動詞『おく』の使用制限についての覚書」『相模女子大学紀要 A 人文・社会系』68 相模女子大学
- 大場美穂子(2005)「補助動詞『おく』についての一考察」『東京大学留学生センター教育研究論集』14 東京大学留学生センター
- 沖裕子(1996)「アスペクト形式『しかける・しておく』の意味の東西差—気づかれにくい方言について—」『平山輝男博士米寿記念論集 日本語研究諸領域の視点』明治書院
- 金水敏(2000)「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子(著)『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店

13. 田口(1992)は、大分方言において、現代共通語の～テオクに相当する形式として「ヨク・チョク」という形式があり、前者が「進行」、後者が「完了」を表すことを報告している。以下は、田口に紹介されている調査票の一部である。

(例) 次にこんな場面を想像してください。三人で連れ立って町に出掛ける約束をしていましたが、一人がやむをえない事情でちょっと遅くなると言ってきました。そんな時、「じゃあ、私たちは先にどうしておくよ」と言いますか。

①二人が歩いているうちに、後から追い付くと思われる場合(進行)

②二人が先に目的地に着いてしまうとと思われる場合(完了) (田口 1992:20)

大分方言では従来「進行」に～ヨル、「完了」に～チョルが使われているが、田口の調査の結果、これらの2形式に加え、①では～ヨク、②では～チョクの使用が確認された。さらに、同論考では、～ヨクと～チョクを比較すると、前者の方が新しく、「ヨル:チョル=x:チョク」という類推から析出されたとされている。

14. なお、筆者の生育地(山口県下関市、0~18歳まで居住)では、「～ヨク」と「～トク(～チョク)」の2形式が用いられているが、この2形式が表す<持続>用法は、京阪方言の～トク(沖 1996、高田 1999)、大分方言の～ヨク・～チョク(田口 1992)のいずれとも完全には重ならない(梁井 2009)。論旨から逸脱するためこれ以上の指摘は控えるが、<持続>の～テオクに関して西日本諸方言間においても用法差があり、しかもその差は方言間のアスペクト体系の違いを反映している可能性があることを示しておく。これについては機会を改めて論じたい。

- 金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 鈴木泰(2004)「テンス・アスペクトを文法史的にみる」北原保雄(監修)、尾上圭介(編)『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店
- 高田祥司(1999)「大阪方言におけるテオク形の用法—東京方言との対照を中心に—」『現代日本語研究』6 大阪大学文学部日本語学講座
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」金田一(編)(1976)所収
- 田口聡子(1992)「大分県方言における『ヨク・チョク』の実態」『国語の研究』17 大分大学国語国文学会
- 角田太作(1992)『世界の言語と日本語 言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編)(2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編)(2007)『現代日本語文法3 第5部アスペクト第6部テンス第7部肯否』くろしお出版
- 野田高広(2010)「『今昔物語集』のアスペクト形式Vテイル・テアルについて」『日本語の研究』6-1 日本語学会
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 梁井久江(2009)「『テオク相当形式』の文法化—明治以降の京阪方言に注目して—」日本語史研究の会 第4回(於)東京大学駒場キャンパス
- 吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」*Linguistic Communications*, 9, Monash University, 金田一(編)(1976)所収

(やない ひさえ・首都大学東京非常勤講師)